

『兵法家伝書』 伝本の比較研究Ⅲ — 細川家本と小城鍋島家本 —

A Comparative Study of the Side Books of *Heiho-kaden-sho*

加藤 純一

Junichi KATO

キーワード：『兵法家伝書』 無刀之巻、細川家本

Key Words : *Heiho-Kaden-sho*, *Muto-no-maki*, *The Hosokawa's manuscripts*

序

本稿は、『兵法家伝書』伝本の比較研究 — 細川家本と小城鍋島家本 — の第三段であり、細川家本『兵法家伝書』の下巻に相応する『兵法家伝書下巻』の中の「無刀之巻」の翻刻を中心に、既に活字化されている小城鍋島家本との比較を試みたものである。

本研究の出発点は、門外不出とされていた『兵法家伝書』が流布されていたという事実に基づく。周知のように、柳生宗矩『兵法家伝書』は四系統の伝本（江戸家本、小城鍋島家本、鹿島鍋島家本、細川家本）があり、流布された『兵法家伝書』のオリジナルがどの系統かを確認する為には、四系統のそれぞれの特徴を明確にしておく必要があると判断し、今回の翻刻並びに伝本比較が試みられた

わけである。即ち、本研究の意義は、流布されている『兵法家伝書』の系統を確認するための、四系統の伝本の特性比較ということになる。

今回の一連の作業では、細川家本の翻刻を中心に小城鍋島家本との比較を行ってきたが、今後は他の伝本までそれを広げる予定である。なお、本研究で用いている細川家本は『日本武道体系』¹⁾に複製収録されたものを用い、比較対象となる小城鍋島家本は拙著『兵法家伝書に学ぶ』²⁾の資料編に掲載されているものを用いた。

一 細川家本『兵法家伝書』下巻（「無刀之巻」） 凡例

1 本書は『日本武道体系』に複製収録されたものを底本とした。柳生宗矩が寛永一四（一六三七）年に細川忠利に伝授したも

のである。

2 本書での翻刻作業では、最初に本文を入力し、続いて朱書きの部分を加筆した。読点は文末箇所では句点に換え、不足箇所においては原文に従い加筆は行わなかった。

3 朱書きの濁点は書き入れたが、本文にない場合にはそのままとした。

4 左側ルビは該当箇所の下に〈 〉で表記した。

二 本文

兵法家傳書下巻

○ 無刀之卷

無刀とて、必しも、人の刀をとらずして、かなはぬと云儀にあらす。又刀を取て見せて、是を名譽メイヨにせんにもなし。わか刀なき時、人にきられしとの無刀也。いで取て見せうなと、云事を、本意とすにあらす。

○一 とられじとするを、是非ゼヒ、とらんとするにはあらす。とられしとするを、とらぬも無刀也。とられじくとする人は、きらふ事をはわすれて、とられまひとばかりする程に、人をきる事はなるましき也。われは、きられぬを、勝とする也。人の刀を取を、藝ゲイとする道理にてはなし。われ刀なき時に、人にきられまじき用の習也。

○一 無刀と云は、人の刀をとる、藝ゲイにはあらす。諸道具シヨダウグを自由ジユウに、つかはんか為也。刀なくして、人の刀をとりて、さへ、わが刀とす

るならば、何かわが手に持て、用いた、ざらん。扇アゼを持て成共、人の刀に勝へし。無刀は、此心懸なり。刀もたすして、竹杖ツヅつひて行時、人、寸の長き刀を、ひんぬひてかゝる時、竹杖にて、あひしらひても、人の刀を、取もし、又、必とらず共、おさへて、きられぬか勝也。此心持を本意ホンイとおもふへし。

○一 無刀は、とる用にても、なし。人をきらんにもなし。敵から、是非ゼヒきらんとせば、取へき也。取事を、はしめより、本意とはせざる也。よくつもりを、心得んが為なり。敵と、わか身の間、何程あれば、太刀があたりぬと云事を、つもりしる也。あたりぬつもりをよくすれば、敵の打太刀に、おそれず。身にあたる時は、あたる分別のはたらきあり。無刀は、刀のわが身に、あたりざる程にては、とる事ならぬなり。太刀のわが身にあたる座にて取也。きられてとるへし。

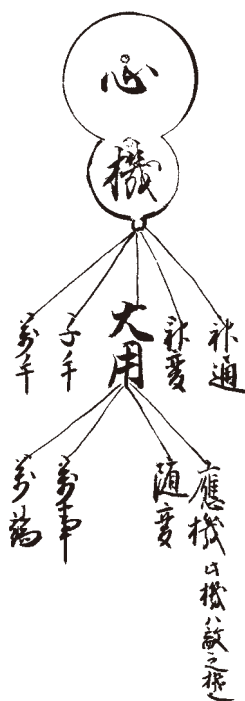
○一 無刀は、人には刀をもたせ、我は手を道具アツクにして、仕相シヤウするつもり也。然は、刀はながく、手はみじかし。敵の身ちかくよりて、きらるゝ程にあらすは、成間敷也。敵の太刀と我手としあふ分別すへきにや。さあれば、敵の刀は、わが身より外へゆきこして、われは敵の太刀の柄の下になりて、ひらきて、太刀をおさふへき心あてなるへきにや。時にあたつて、一様にかたまるへからす。いつれにても、身によりそはすは、とられましき也。

○一 無刀は、當流タウリウに、是を専一センの秘事ヒジとする也。身構、太刀構、場の位、遠近エンキン、うこきはたらき、つけ、かけ、表裏ヒヤウリ、悉皆シツカイ、無刀のつもりより出る。故に、是、簡要カンヨウの眼也。

○一 大機大用。用を、用とよむへし。物の駄用の時、用とよむへし。物ごとに、駄用と云事あり。駄が、あれば、用がある物也。たとへば、弓は、駄なり。ひくぞいるぞ、あたるぞと云は、弓の用。燈は、駄なり。ひかりは用也。水は駄也。うるほひは、水の用。梅は駄也。カ香ぞ色ぞと云は用。刀は駄なりきる、つくは、用。然は、機は駄なり。機から外へ、あらはれて、様々のはたらきあるを、用と云也。梅の駄ある故に、駄より花さき、色香あらはれ、匂ひをはつすることくにへニホイトハカノ行ワタリイツクニモミチタルヲ匂ヒト云也。機うち有て、其用、外にはたらき、つけ、かけ、表裏懸待、様々の色を、しかけなと事、内にかまへたる機あるによりて、外へはたらきか出る。是を用と申也。大とは、ほむる言葉なり。大明神大権現、大菩薩、など、云も、大は、褒美の言葉也。大機なる故に、大用かあらはる、也。禪僧の自由自在に、身をはたらかし、何事をいふも、何事をするも、皆道理にかなふて、理に通ずる。是を大神通と云大機大用と云也。神通神変と云は、別に虚空から、鬼神かくだりて、不思議をなすなど、云を、神変とはいはず。何事をするをも、自由自在をはたらくを云也。数々の太刀構、表裏偽、諸道具のさばき飛あがり飛さがり、手にやいばをとり足に、蹴おとし、様々にはたらき、ナラヒ習の外に、自在を得事、是を大用と云也。常々内に機を、具せざれば、大用は、あらはるましき也。座敷に、なるとも、上を先見、左右を見て、上より、自然落る物あらばと、心懸、戸障子のきはに、なるとも、ころびかせんと、心にかへ、或は、貴人、高位の、御座ちかく、伺候の時、自然の、

不慮の事や、出来せんと、心懸、門戸を、出入共、出入に付て、心をすてず常々、心にかくる。是皆機也。此機常に、内に在故に、自然の時、きどくの、早速が、出合、是を、大用と云然共、此機がいまだ熟せざる時は、用があらはれぬなり。万道に、心懸が、つもり、功がかさなれば、機が熟して、大用がはつする也。機か、こりかた堅まり、いかたまれば用かなき也。熟すれば、全身、全駄に、のびひろがり、手にも、足にも、目にも、耳にも、その所々にて、大用がはつする也。此大機大用の人にあふては、習のたけを、つかふ兵法は、手をあぐる事も、ならぬ物也。見づめなど、云事も、あるべき儀也。大機の人の、目にて、一目、にらみたらは、そのマナコ眼ざしに、心をとられて、太刀を、ぬく手を、わすれて、た、あるへし。めまぢ一する程なりとも、おくれたらばや、負を取へし。猫が、にらめは、ねずみが、そらよりおつる者也。猫の、眼ざしに、氣をとられて、ふむ足をもわすれて、おつる也。大機の人にあふて、鼠の猫にあふることく也。禪句に、大用現前不レ存二軌則一と云。現前とは、大機の人大用が前にあらはる、と云義也。此大機大用の人は、そつとも習法符にか、はらぬを不レ存二軌則一と云也。軌則とは、習法符法度の事也。よろつの道に、習、法符、法度と云事有也。至極の人は、はらりと、それを、はなる、也。自由自在をする也。法の外に、自在をする。是を大機大用の人と云也。機と云は、内に、油断なく、物ごとを、おもひまふけて、居を云也。しかれば、其おもひつめたる機が、いかたまり、凝(コリ)かたまりて、かへつて、機にからめられて、不自由なり。いまた、機か、熟せぬ故也。

功をつめは、機か熟して、わか昧に、とけひろこりて、自由を、はたらく。是を大用と云也。



機とは、スナハチ即氣也。座によつて、機と云也。心は、おくなり氣は、口なり。樞機スウキ(へクル、)とて、戸のくる、也。心は、一身の主人なれば、おくの座に居る者と心得へし氣は、戸口に居て、心を、主人として、外へはたらく也。心の善惡に、わかるは、此、機から、外へ出て、善に行も悪に行も、此機に、よりに分る、也。戸口に、きつとひかへ、たもちたる氣を、機と申也。人樞クルをあけて、出て、外にて、悪をするも、善をするも、神ペン變神通ゾウをはたらくも、此戸口の、くる、を、あけざる時の、思案シアンによる也。されは此機が、大事の物也。此機が、はたらけば、外へ、出て、大用が、あらはる、也。何れも、氣と、心得てはちかはぬ也。そのあり所に、よいていひかへた物也。又しかりとて、おく口と云て身の内にいづくを、おくといひ、いつくを口なりと、定る事なし。たとへ、なれば、おくと、口ともいふなり。人の、ものいふがことし。いひはしむる所を、口ともいひ、云はたす所を、おくと云へしそのことにはにおく

口の座敷は、さたまらぬ也。

○一 摩拏羅尊者の偈ケに云く

心隨二万境一轉、々處實能幽

右の偈は、參學サンガクに秘する事也。兵法に、此意簡要なる故に、引合て、爰コに記レ之。參學サンガクせざる人は、とくと、心得がたかるへし。萬境とは、兵法ならば、敵の数々のはたらき也其一つくのはたらきに、心がてんする也。たとへば敵が太刀をふりあぐれば、其太刀に、心がてんし右へ、まはせは、右へ心かてんじ、左へまはせは、左へてんずる。是を隨テニ万境ニ一轉テと云也。轉テ實ニ能幽ナリと云所が兵法の眼也其所に心があとを残さずして、こぎ行舟の、あとのしら波と云ことく、あとは、きえて、さきへ轉テじ、そつとも、とまらぬ處を、轉テ實ニ能幽ナリと、心得へし。幽也とは、かすかにて、見えぬ事也。心をそこくと、めぬと云儀也。心が一所にと、まりたらは、兵法に、まくへき也。テン轉する所に、残たらは、散々也。心は、色もかたちもなければ目に本より見えぬ物なれとも、着チヤクして、と、まれば、心が、そのま、見ゆる者也。たとへばしらぎぬのことく也。紅クレナイをうつしとむれば、紅ムラサキになり、紫を、うつせは、むらさきの色に成なり。人の心も、物にうつればあらはれ見ゆる也。ちゴ若衆に、心をうつせは、やかて、人が見ゆる也。おもひ内に、あれば色外イロホカにあらはる、也。敵のはたらきをば、よく見て、そこに、心をとめば、兵法にまくへき也。心をとむなと云事に此、偈を引用る也。下の二句は畧して不レ記レ之。參學サンガクして、全篇は、しるへし。兵法には上の二句にて、すむ事也。

○兵法の佛法にかなひ、禪に通ずる事多。中に殊更着をきらひ、物ことにと、まる事をきらふ。尤是、親切の所也。と、まらぬ所を、簡要とする也。江口の遊女の、西行法師の哥に、こたへし哥

家を出る人としきけばかりの宿に

心とむなとおもふばかりぞ

兵法に、此哥の、下の句をふかく、吟味してしからんか。如何様の秘傳を得て、手をつかふとも、其手に、心がと、まらば、兵法は負へし。敵のはたらしきにも、我手前にも、きつてもつひても其所々に、と、まらぬ心の、稽古、専用也。

○龍濟和尚示衆云、是柱不見、柱非柱不見、柱是非已去了、是非裏薦取。此話を、よろつの道に、おもひあつへきと也。さる智識の示されける、兵法に、おもひあて、爰に記置者也。是柱非柱とは、是非が、柱の立たごとく、是非善悪がむねのうちに、きつと、立ある也。是さへむねに置事は、はつたと、いやなるに、非な事ならば、猶々いやなり。さる程に不見、柱と云也。是非の柱を、見るなど云儀也。此是非善悪が心の病也。此病が、心をさらねば、何事をなすも、よからざる也。さるによりて、是非已去了、是非裏薦取と云也。是非をさりきつて、かへつて、是非のうちに、まはりて、井居よ。是非のうちより、至極の位に薦のほれと云儀也。佛法に達したりとも、是非を離たる眼、誠、難有事也。

○尚法應捨何況非法。此文の心は、法とは、眞実の正法也。正法也とも、一度さとりおはりては、心にとむへからず。法尚應捨也。正法さへ、さとりて後、是をむねにと、めは、胸の塵也。何況

非法也。正法さへ捨へし。いわんや非法ならば、是を胸におくへからすといへる也。一切の道理を見おはりて、皆胸にと、めす、はらり、くんとすて、胸を、空虚になして、平生の何となき心にて、所作をなす。此位にいたらずは、兵法の名人とは、難言也。兵法は、我家の事なれば、さして兵法と申也。兵法一つに不可限。よろつの道、如此也。兵法つかふに、兵法の心のかずは病氣也。弓射に弓射る心のかずは、弓の病也。只常の心に成て、太刀をつかひ、弓を射ば、弓に難なく太刀自由なるへし何事にも、おとろかす、常の心よるつによし。平生の心を、うしなひて、何にてもその事を、いはんとおもは、聲ふるふへし。常の心をうしなひて、人前にて、物を書ならは手ふるふへし。常の心と云は、胸に、何事をも、不殘不置、あとをはらりくんとすて、胸が空虚になれば、常の心なり。儒書をよむ人、此虚心の道理を、不心得して、ひとへに、敬字の儀に、落る也。敬の字の心は、至極向上にはあらず。階へキザハシの、一二段に、ある修行也とぞ。

兵法之本書一卷者、名進履橋大凡目錄也。亡父但馬守宗嚴、自上泉武藏守藤原秀綱、所直傳也。右之目錄之分、於相窮人者、書寫右ノ本書一卷、而授之、可レ為二相伝之證一者也。今此上下両卷者、習之外之別傳也。亡父一生、以道、寢食之間不忘之。故、於此道一得二妙理一、平生置予於左右、談レレ妙ヲ説クレ玄ヲ有ニ。聊モ聞得一則拳々而服膺予成レ人握レテ、手刀柄ヲ一而雖レ繼ニ父業一未會テ、自由一漸過二知命之年、得ニ此道之滋味一、每レ得ニ一件之理一、記レ之

積シテ涉リニ多端ニ一レ所レ窮ル。歸ニ一心ニ一々々レ涉リニ多事ニ一々々レ収ニ一心ニ一。畢竟在リニ于茲ニ一。今書之、為ニ両卷ニ一、并本書、共三卷、以テ遺トニ之家ニ一云。

上泉武藏守藤原 秀綱

亡父柳生但馬守平 宗厳

的子柳生但馬守平 宗矩 花押

寛永十四年丁丑五月吉日

細川越中守殿 泰

此卷上下を殺人刀活人剣と名付たる心は人をころす刀、却而人をい
かすつるぎ也とは、夫乱たる世には故なき者多死する也乱たる世を
治めむ為に殺人刀を用て已テ治ル時は殺人刀即活人剣ならずやこ、
を以テ所名付也。

古越州公より肥州公江亡父但馬守進上仕置候御書物三冊今以於拙者
相違無御座者也仍而如件

柳生飛驒守 宗冬 花押

寛文三年

卯ノ四月八日

細川越中守殿 泰

三 小城鍋島家本との比較

1. 構成

『兵法家伝書』下巻は「活人剣」と呼ばれる^③。この「活人剣」の巻
の中に「無刀之巻」が併設されており、それは次の六つの項から構
成されている^④。

- ① 無刀 ② 大機大用 ③ 転処実ニ能ク幽ナリ ④ 是非裏
に薦取せよ ⑤ 法尚応捨、何況非法 ⑥ 後文

2. 考察

最初に、『兵法家伝書』伝本の比較研究 — 細川家本と小城鍋島
家本 — の考察において導き出されたことを確認しておく。そこで
は、細川家本より後に執筆された小城鍋島家本が細川家本を底本と
していない事由を述べた。それは本文において、

- ア. 平仮名の元となる漢字が一定していない。
イ. 漢字と平仮名が不統一である。
ウ. 改行すべきところがされていない。

の三点に集約された。

また、朱書きの部分においても、

- ア. 振り仮名の施し方
イ. 句読点の打ち方
ウ. 特徴的な読み方
において統一的な振り方が見られないことにある。

これを受けた前回「『兵法家伝書』伝本の比較研究Ⅱ——細川家本と小城鍋島家本」では、本文での「改行すべきところがされていない」を除く他の五点においても、同様の差異が見られることを指摘し、加えて細川家本には「語彙の欠如」があることも指摘した。即ち、ここにおいても、小城鍋島家本が細川家本を底本としていないことが確認されることになった。

さて、本稿で考察の対象とした「無刀之巻」を鳥瞰すると、前回までの考察同様、「平仮名の元となる漢字が一定していない」「漢字と平仮名が不統一である」「振り仮名の施し方」「句読点の打ち方」「特徴的な読み方」の特徴が窺える。この内、朱書き部分の振り仮名の特徴的事例として、構成④「是非裏薦取」における、「さるによりて、是非已スアニサリヲツテ去ヒリニセンシユセヨ了ヒリニセンシユセヨ是非裏薦取と云也。」が挙げられる。「已去ステニサリヲツテ了」は、小城鍋島家本では「已去ステニサリヲツテ了」とある。また、構成⑥「後文」における「進履橋」が「進履橋シンリョウキョウ」と読みが振られていることは、特徴的読み方の事例として挙げる事ができよう。これは、「シンリキヨウ」と読ませるのが一般的である。

前回Ⅱの考察で新たな事例として挙げた「言葉の欠如」では、構成⑥「後文」における「亡父一生、以道、寢食之間不忘之」の「以道」は、小城鍋島家本では「以此道」と、「此」があることから、「此」が欠如した事例として挙げる事ができよう。

さらに、「兵法家傳書下巻」で見られた左側へのルビにおいても、次のような箇所において確認することができた。

・②大機大用 「句ひをはつすることくに」に対して「ニホヒトハ

カノ行ワタリイツクニモミチタルヲ句ヒト云也」とある。

・同② 「機が、いかたまり、擬かたまりて」において「擬」の右側に「ウノメガイ」、左側に「コリ」とある。

・同② 「枢機とて、戸のくる、也」において「枢」の右側に「スウ」、左側に「クル、」とある。

・⑤法尚応捨、何況非法 「階の、一二段に、あるシユキヤウ修行也とぞ。」において、「階」の右側に「カイ」、左側に「キザハシ」とある。

これらの左側ルビは、すべて小城鍋島家本ではみられない。つまり、これらは小城鍋島家本より後に完成した細川家本において振られたルビと看做すことができる。

結語

『兵法家伝書』伝本の比較研究——細川家本と小城鍋島家本——でも取り上げたが、両家本の原本と言えるようなものが江戸柳生家にあると渡辺一郎氏が述べていることに鑑みると、今回の考察で明らかになったような差異は、既に両の原本の段階で生じていたか、あるいは書写の段階で写し手の意図が加味された可能性を指摘することができる。

ここまで三回に亘って考察を加えてきた本研究は、『兵法家伝書』流布本の原典を探し出す為のオリジナル本の比較研究であり、細川家本を翻刻する作業でもあった。今回の一連の作業より導き出された特徴は次のようにまとめられる。

巻上刀人殺					
①	細川家本	刀二にて、つかふ兵法、は負も一人、	刀二にてつかふ兵法は、負も一人、		
④		真実を内にかくして、外にはかりこと	(ルビなし)		
⑪		ゆぶりもつてづるく	ゆぶりもつてづるく		
⑭		内心に油断なくして、此けいこ、つもりぬれは、	内心に、油断なくして、此けいこつもりぬれは、		
⑱		初重後重あり	初重、後重あり (ルビなし)		
⑱		余方へ乱さる也。	(ルビなし)		
⑱		後重には	○後重には		

(一) 本文において

ア. 平仮名の元となる漢字が一定していない。

イ. 漢字と平仮名が不統一である。

ウ. 改行すべきところがされていない (あるいは項目立てがおこなわれていない)。

エ. 語彙の欠如 (あるいは書き忘れ)。

(二) 朱書きにおいて

オ. 振り仮名の施し方の差異。

カ. 句読点の打ち方の差異。

キ. 特徴的な読み方の存在

ク. 左側ルビの差異。

これらの特徴のうち、特に注意を要する差異を抽出したのが、次の表である。

活人剣下巻 (無刀之巻)						活人剣下巻					
⑥	⑥	⑤	⑤	②	②	②	⑭	⑭	⑭	⑬	⑬
以道	進履橋	階へキサハシの、一二段に	已去了	枢(ケル)機として、	擬(コリ)かたまりて	句ひをはつすることくに(ニホヒトハカノ行ワタリイツクニモミチタルヲ句ヒト云也)	雷電	心空也	唯一	打た所をかへさすして、	間不 _レ 容髪(テイタカミスチ
以道	(ルビなし)	(ルビなし)	已去了	(ルビなし)	(ルビなし)	(ルビなし)	雷電(カミナリイカツチ)	心空也(シンノクウナリ)	唯一(タマヒトツ)	打た所を、心をかへさすして、	間不 _レ 容髪(テイタヘイレカミスチ)

『兵法家伝書』は秘伝書とし門外不出の書とされてきたが、実際には構成において複写され、多くの者の目に晒されている。ただし、その複写物が四つあるどの原典由来の物なのかは元より、原典間の差異比較さえ行われてこなかった現実がある。したがって、順序的には流布本の原典を辿る前段階の作業として、原典間の比較考察が行われなければならないことは自明である。

本研究が三回に亘り細川家本の翻刻と共に小城鍋島家本との比較を行ってきた背景にはこのようなことがあることを、再度ここに記し置きたい。先ずは今回の比較研究を一つのステップとして、他の二

つの原典を取り上げての比較考察を早急に実施したいと考えている。

前述の如く、筆者の主眼はこの原典比較にあるのではなく、流布本の出典調査にある。この出典が明らかになることは同時に、当時の柳生家と原典が贈られた各大名と、そして流布本所有の家との関係が明確になることに他ならない。秘伝本がどのような経路で門外に行き渡っていったのか、感心の尽きないところである。

最後に、今回の三回に亘る研究を振り返る過程において、翻刻箇所には誤記があることが判明した。正誤表を巻末に掲載しておく。

【注】

- (1) 今村嘉雄他、同朋舎出版。全十巻で付属として小城鍋島家『兵法家伝書』の複写物がついている。
- (2) 拙著『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館、二〇〇四年。
- (3) 『兵法家伝書』下巻の末尾に「此巻上下を殺人刀活人剣と名付たる心は」とある。
- (4) 前掲書ii、二二頁参照。
- (5) 『兵法家伝書』伝本の比較研究Ⅱにおいて、左側ルビの事例を六つあげ、その総てにおいて小城鍋島家本では振られていないとしたが、その後の作業の結果、小城鍋島家本でも振られていることが判明した。

Abstract

Comparing the text of “Heiho-kaden-Syo” of Ogi-Nabeshima (which the author is now reproducing) with that of Hosokawa, this study aims to illustrate all the textual variants to see if the text is based on the common source. Reading “Muto no maki” from “Katsuninken Gekan” the finds that 1) the textual style peculiar to “Muto no maki” is also found in “Setsuninto Jokan” and “Katsuninken Gekan”; 2) the different styles of rubric (giving kana along Chinese characters) include the left side are found especially in “Muto no maki”; 3) these two texts of “Heiho-kaden-Syo” are therefore unlikely to be based on the same textual source.

正誤表

兵法家伝書上巻*1	
頁	原文
一四頁下段	悪レ之。不レ獲
一五頁上段	大機大用 云へし。また両陣治れる時
一五頁下段	はて／＼までも 受領国司を定め 受領国司代官地頭 あらまほし。是 はしめ終
一六頁上段	ものなれば、天下 あらず。秘するは、 然ば、門は しかれば学は門 家にあらず。 ならざる也。
一六頁下段	しらすと云事なき 百手の太刀を 心也。さてよく 格レ物之心也
一七頁上段	おとろかすか手立 きびしく切て 先をさせむ為也。
一七頁下段	相がまへの事 目付をはつす
一八頁上段	悪レ之不レ獲
一八頁下段	大機大用 云へしまた両陣治れる時
一五頁下段	はて／＼までも 受領国司を定め 受領国司代官地頭 あらまほし是 はしめ終
一六頁上段	ものなれば、天下 あらず秘するは、 然ば、門は しかれば学は門 家にあらず。 ならざる也。
一六頁下段	しらすと云事なき 百手の太刀を 心也さてよく 格レ物之心也
一七頁上段	おとろかすか、手立 きびしく切て 先をさせん為也。
一七頁下段	相がまへの事 目付をはつす

一九頁上段	かけ、習、のか、り はたらくべきとも 成かたき物也。	かけ、習のか、り はたらくへきとも 成かたきもの也。
一九頁下段	つもりあれば、 さくればこして 拍子かのれば ふるひく	つもりあれば、 さくればこして 拍子かのれば ふるひく、
二〇頁上段	ちがふ様にすべき也 能けいこすまして かけて、見るべし。	ちがふ様にすへき也 よくけいこすまして かけて、見るへし。
二〇頁下段	下は氣、懸に されば、上を吹は、 ふためかずして 氣を懸に無 _二 油断 _一	下は氣懸に されば、上を吹は、 ふためかずして 氣を懸に、無 _二 油断 _一
二一頁上段	外懸なれば、外 しかれば念を以て 可心得そや。こたへ 修行をもつて 人が、道者也。	外懸なれば外 しかれば念を以て 可心得そやこたへ 修行をもつて 人が、道者也。
二二頁下段	おもはずして、無心 木人如 _レ 對 _二 花鳥 _一 居たるかごとくと也 木人は心なければ うごかざる。尤道理 成へきそや。木人 あるべからず。	おもはずして、無心 木人如 _レ 對 _二 花鳥 _一 居たるかごとくと也 木人は心なければ うごかざる尤道理 成へきそや木人 あるべからず。
二二頁上段	射ざる也。常の心に	射ざる也常の心に

<p>二三頁上段 用る事也。 教る也。 後重には、 はなしかけてやり 身口意の三業平等 始終治りたる 身口意の三業を浄め うごかず、千波万波 細川越中守殿 参</p>	<p>用る事也 をしゆる也。 (改行しない) はなしかけて、やり 身口意(クチトコ、ロト)の三業平等 始終(ハシメトラハリ)治りたる 身口(ミトクチトコ、ロト)意の三業を浄め うごかず千波万波 細川越中守殿 泰</p>
<p>兵法家伝書下巻*2 一六頁上段 百様之構あり共 手字種利劔一つを眼 有也。隠時は無也。 無無の時は、無に付 秘傳也。是を、 無も有と云也。有と 名為「油神妙」 一七頁上段 あらはるましき也。 所之事、口伝すへし。 早もあく、遅きも 極意之一刀也。敵、 眼に、利剣を見る 一八頁上段 病とは、心のそこ 一八頁下段 はるく高き天に 一九頁上段 説給ふと也。経は、</p>	<p>百様之構あり共 手字種利劔一を眼 有也隠時は無也。 無の時は、無に付 秘傳也是を、 無も有と云也有と 名為「油神妙」 あらはるましき也。 所之事、口傳すへし。 早もあし、遅きも 極意之一刀也敵、 眼に、手利剣を見る 病とは、心の、そこ はるく高き天に 説給ふと也経は、</p>

<p>二〇頁上段 間不_レ容髪とは 一にさると云也。</p>	<p>やれ口惜_{クチオシ}や、 いかれば、敵きひし 間不_レ容髪(アイダ カミスチヲ)とは 一にさると云心也。</p>
<p>二〇頁下段 かくしこと葉なり。 一心は此身の主人 心のうごかぬは空也 さとりたらば、一切 其本心にわがなす</p>	<p>かくし言葉なり。 一心は此身の主人 心のうごかぬは空也 さとりたらば一切 其本心に、わがなす</p>
<p>二二頁上段 此ノ本心、妄心に、 又相似_{アヘニタル}の禪_{ジン}とて、 為_レ理_リ。是皆此身の 邪正_{ジヤウシヤウ}(ヨコシマ)をよくいひわ</p>	<p>此本心、妄心に、 又相似_{アヘニタル}の禪_{ジン}とて、 為_レ理_リ是皆此身の 邪正_{ジヤウシヤウ}(ヨコシマタダシ)をよくいひわけ</p>
<p>二二頁下段 け</p>	<p>ひわけ</p>

*1兵法家伝書上巻 『目白大学人文学研究』第四号 平成二〇年二月
*2兵法家伝書下巻 『目白大学人文学研究』第五号 平成二二年二月